漢民族の同化力說に就いて

白鳥博士の易簀は今更ながら學界の大なる損失であつて、眞に痛恨の極である。博士が後半生の心血を注いで育成せられた東洋文庫に於てこの追悼講演會の催されるに當つて、曾て博士の講筵に侍して主題に關する明快なる講義に魅せられた當時を思ひ浮べながら、こゝに聊か管見を述べて批正を仰ぐ機會を得たことは、自分にとつてはせめてもの心やりである。

明治三十七年博士が東京帝國大學文科大學教授として初めて口述せられた「支那北部に據れる民族の歴史」といふ講義の中で、博士の持論として亞細亞史上の大勢を、古來こゝに據つた南北兩民族の爭鬪に外ならぬと說き、「支那に據つた漢民族は屢〻北方民族の勢力に破られてその支配を受け、その結果として漢民族は保守主義となり、その文化は舊來のものを保存することを重んじ、新しき發展を遂げないで今日に至つた。蓋し北族に比して武力弱く然も高き文明を持つた漢族は、北族の勢力の下に雌伏しながら保守主義を持して國民性を維持して居れば、新來の北族を同化することを得るからである。今の皇帝は滿洲族であるが、國民が保守主義を有すればこそツングースである異族を漢族化することを得たのである」云々と述べられ、また「漢民族の長所は同化力の强いことであつてこの點實に他に比倫を見ない。北狄が一たび長城を越えると忽ち土着民となり、その民族性を忘れて漢語をあ